

辺境の地で

黎明れいめい

はたしていま何時なのか？ 寝起きのぼやけた頭では判然とせず、ヘッドランプの有りかもしない出せない。シユラフのフアスナーを開け、枕元の周辺をきぐつてそれとおぼしき固形物を引き寄せると、腕時計の文字盤をまぶしく照らし出した。

まだ五時前である。しかし外は白み始めているようだ。壁を大きく切った東側の、出窓をおおった木枠の隙間から、未明の薄明かりと冷気が漏れ染みてくる。

ひっそりと、室内は暗い。その床に横たわる、中村以下同宿したPMS病院のスタッフたちも、いまだ深い寝息を立てている。

だが私には、起きなければならぬ理由があった。

乱雑に靴が脱ぎ散らされた入り口を抜けると、ふっと湿った臭いが鼻をつく。石作りの建物に特有の、鼻孔をひんやりと刺す重い臭いが、いま異国の地に居ることを思い起こさせる。10畳ほどの居室が四つに、台所のスペースが1カ所――。この村にあつては、破格の建物と言つていい白塗りの政府宿舎は、普段は使う者もなく捨て置かれている。

台所のスペースを横切つて、勝手口から外に出た。途端に思わぬ寒気に、身が縮んだ。昨夕、我々はペシャワールからこの北辺の地・マスツージに着いた。酷暑の6月、ペシャワールは連日40度を超えるうだる暑さだったが、標高2800メートルを越すここマスツージでは、朝晩はさすがにしつとり冷える。川霧なのか朝靄なのか、しじまに漂う冷気も手伝つて、私はもう一度、ふるつと体を震わせた。

敷地の外に出る。川音が立ちのぼるように染みてくる。我々の宿舎は、二つの谷が合流する扇状地の突端に建っており、ここから二つの流れが一つになって、大河(ヤルクン河)がチトラル方面へと流れ去る。指呼の距離には、5000メートル級の山々



が雪を抱いて屹立し、緑濃い北辺のオアシスは、いまだ深い闇の中である。

石につまずかないように、石と排泄物を見まちがわないように、河原をしばらく行つて、ほどよい窪みに腰を下ろした。

じつに何年ぶりだろう。こうした静寂に身をひたすのは…。おのずと、心身の夾雑が、洗い流されて行くような感覚を覚える。

ふと空を仰ぐ。

山陰が、これ以上ないほどの漆黒を見せている。ようよう白みはじめたとは言え、谷に朝日の訪れはまだ遠い。しかしそのなかにあつて、谷が開けゆくヤルクン河下流の風景だけが、別世界を思わせる黎明を見せていた。

これを見るために、私はあえて早起きしたのである。見れば…。

薄くたなびく紫雲を切り裂いて、黄金色の朝日が山の端をかすめて射し込み、埋め尽くす漆黒と黎明が交錯するなかに、雪をまとった巨大な山塊が、いまでも眠りから醒めたように浮かび出る。朱色に染まった雲が、あるいは群青や藍色に変化する鮮烈が、いつそう白い巨体を際立たせて行く…。テイリチ・ミール―。標高7708メートルの、ここヒンズークシユの盟主の朝焼けである。限りなく圧倒的な、神々しくもたおやかな絶景が、そのとき私の眼前にあった。

思えば78年、中村はこのテイリチ・ミールに魅せられて、現在に至る医療活動の発露を見いだしたのである。『神の摂理』を、その心に聴いたのである。そしてその後、何物かに導かれるように、10数年の歳月を異国の地で費やしてきた。

何を観て、なにを思惟い、何が中村をしてそうさせたのだろうか……。

